

「百物語」

90話突入

白石加代子さん

女優・白石加代子さんの「百物語」が90話目を迎えた。1992年から、怖い話や不思議な物語を朗読してきたシリーズ。上田秋成「雨月物語」、泉鏡花「高野聖」、三遊亭円

白石加代子さんの「百物語」から「銀河鉄道の夜」



な人物が次々と現れては消えていく物語にあつて、白石さんは巧みな声の変化と豊かな表情でメリハリを付けて立体化。電光板や挿入曲を使うという、これまでにはなかった演出も多用した。恐怖が基調の「百物語」シリーズでは異色づくしだった。

朝「真景累ヶ淵」、坂口安吾「桜の森の満開の下」などの幻想文学から、浅田次郎「鉄道員（ぽっぽや）」、宮部みゆき「小袖の手」まで、日本文学を総覧するかのような作品群となった。

だが、賢治の澄んだ世界へと引き込まれるような快感があった。

第90話は宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」だった。星座をめぐるジョバンニとカムパネルラ、2人の少年を描いた賢治の代表作。構成・演出の鴨下信一さんは、活版所や牛乳店などジョバンニの日常をつづった「生の世界」は極力省き、「死の世界」とも映る銀河鉄道に乗っての旅を軸にした。プリオシン海岸での化石拾い、鳥捕りとの出会い、タイタニック号の乗船客と思われる姉弟の登場のほか、冒頭で関東大震災で被災した知人にあてた手紙の下書きの裏に、この作品の初稿を書き始めたエピソードを加えるなど、「死」を強く印象つける。

白石さんは、「賢治の思想が重層的に織り込まれていて、私なりに手を加えようとする」と弾かれてしまう難物でした。ふだんより長めに1か月以上けいこしましたが、公演を重ねるにつれて、作品が深まったり広がったりしている実感があります」とほほ笑む。

伝説では100話目を語り終えた時に「もののけ」が現れると言われる「百物語」。このシリーズでは99話が最終話となる。

「正直、こんなに長く続くとはいっていませんでした。SCOT退団後、仕事もなかった時代に始め、あつという間に大きくなっていった。女神がほほえんでくれたんです。舞台の神様って、いるんですね」

ゴールの日も見えてきた。

3月5日の東京・亀戸のカメリアホール公演では、奇怪

(杉山弘)

